



TITLE:

<批評・紹介> 國立北京大學研究院
文史部編「柯劭忞先生遺著第二種
新元史考證 一本五十八卷」「柯劭
忞先生遺著第三種 譯史補 一本六卷
」

AUTHOR(S):

藤枝, 晃

CITATION:

藤枝, 晃. <批評・紹介> 國立北京大學研究院文史部編「柯劭忞先生遺著第二種 新元史考證 一本五十八卷」「柯劭忞先生遺著第三種 譯史補 一本六卷」. 東洋史研究 1935, 1(2): 164-168

ISSUE DATE:

1935-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/138674>

RIGHT:

柯劭忞先生遺著第二種

新元史考證 一本五十八卷

同 第三種

譯 史 補 一本六卷

國立北京大學研究院文史部編

先年物故した「新元史」の著者柯劭忞氏の遺稿が今度出版された。(その第一種は春秋穀梁傳注である)

歷代正史中最も評判の悪い「元史」の改修の企ては邵遠平の「元史類編」に始まり、錢大昕、魏源、洪鈞、屠寄の諸家出で、清末所謂金元歴史・西北地理の學の隆昌を來し、それ等諸家の後を承けて大成したものが柯氏の「新元史」二百五十七卷である。時の民國政府は之を正史の列に加へ、又、東京帝國大學よりは之に對して學位が贈られた。その教授會の審査要旨には「新元史」の長所として、一、西方史籍を參照せる事、二、元朝秘史

を利用せる事、三、經世大典、元典章等を參照せる事を擧げ、同時にその短所として、一、取捨選擇の宜しきを得ざる事、二、考證尙不充分なる點のある事などを擧げてゐるが、それよりも我々が新元史を利用するにあつて最も當惑する事は「元史」を改めた部分の出所が何とも記されて居ない事であると思ふ。中國の碩學故王國維、故梁啓超、陳垣の諸氏もその點を非難し、『西洋風の新史體を用ふるに非ずんば、「元史」全部を改造せずして寧ろそれに校訂増補を施すべきである。』と説いて居る。

(李思純著「元史學」二〇〇頁、蕭一山「清代學者生卒著述表」二六一頁等に引く所)

所が柯氏の遺稿なる「新元史考證」がこゝに公刊された。蕭一山著「清代通史」下卷二「清代學者著述生卒表」の柯劭忞の條に(二六一頁)、「新元史二百五十七卷。考證若干卷。(余曩に梁任公先生の座次に在つて王靜安先生に逢ふ。譚此書に及び、均しく未だ體例及び取材を叙べざるを以て憾と爲す。嘗て之を柯先生に詢ふ。據て先生云く、『考證は卷數甚だ多く、未だ能く刻行せず。』と。因て余に原稿及簡本一冊を示すに、皆引據出處の精密なること異常なりき。』と云つて居たものが即ちこれであらう。本書の公刊は新元史の價值を益々高からしむるも

ので、我々新元史を利用する者にとつて甚大な喜びと云はねばならぬ。

其の内容は、卷頭に『〔新元史〕卷内に秘史・異史の文を用ふるも俱に出處を標さず、惟其の事の異同あるものゝみを標す。』と述べて居る様に、他本との事實の異同、譯音文字の異同を考へて自説の根據を示し、或は地名、人名、部族名等を説き、聞々書中に現れる蒙古語の意味を説いた項もある。今日についた一、二の例に就て述べると、

イ、「新元史」開卷第一に『蒙古之先、出於突厥。』と甚だ突飛な記載があるが、「考證」を見ると此は洪鈞の「元史譯文證補」の『自來（「孝證」には「東」と誤植してゐる）突而屈各族、以及蒙兀爾。皆各有君長云々」なる記事に基づき他に一、二の材料を擧げて説いたものである。所が洪氏の此の文章は決して突厥と蒙古とが同族なりとは云つて居ない様に思はれ、従つて洪氏に據つた柯氏の論據は薄弱である事が判る。

ロ、太祖成吉思汗が崩じて太宗窩闊台が即位するに至る迄の事情に就ては「元史」卷一の末尾に『戊子年。是歲皇子拖雷監國。』同一に、『太祖崩。〔太宗〕自霍博之地

來會裏。』と記されてゐるのを、「新元史」卷四には『太祖崩。皇弟拖雷監國。帝（太宗）分地在葉密爾河。留於霍博之地。安輯部衆。』と書き改めてゐる。此の條は「考證」卷四を見ると全く那珂博士の説（『成吉思汗實錄』卷十二五八四——八頁）に據つたものである事が知られる。即ち太祖の崩じた時は太宗はその左右に居つたもので、葬儀が終つて後に自領内に騷亂の生ぜん事を恐れた爲に一旦歸つたものだと言つてゐるであつて、その意見は正しいと思ふ。尤も「讀史方輿紀要」には霍博の地は和林の北となつて居て窩闊台汗國になつてはゐない。若し然りとすれば此の間の太宗の行動の意味も異つて來なければならぬ筈であるが、是はやはり那珂博士の考へられた如く霍博は窩闊台汗國內の地と見るべきであらう。

ハ、昨年の「社會經濟史學」に小林高四郎氏が「元代斡脫錢小攷」なる論文を發表され、又今春の支那學會大會・史學會大會の講演に於て羽田教授・岩佐精一郎氏が東西時を同じくしてこの斡脫錢に就て述べられて、此の問題は近頃我學界の注意を惹いてゐるが、此の斡脫に關して、「元史」卷三「憲宗本紀」の二年の條に、

十二月戊午。大赦天下。以帖哥紉闊闕朮等掌帑藏。

字蘭合刺孫掌幹脫。阿忽掌祭祀醫巫卜筮。阿刺不花副之。諸王合刺薨。以只兒幹帶掌驛傳所需。字魯合掌必闌赤。寫發宣詔及諸色目官職。徙諸匠五百戶修行宮。

といふ記事がある。所が「新元史」卷六の之に當る條には、この最後の部分を改めて『只兒幹帶掌驛傳。徙工匠五百戶修行宮。』と爲し、此の字魯合の一項を削つた理由に就ては「考證」卷六に於て『掌幹脫。即幹爾朶。舊史此下有字魯合掌必闌赤事。一事兩載。今削之。』と述べて居る。即ち柯氏は幹脫を *ordo* と讀み『修行宮』と『掌幹脫』とを同一事を云つたものと解した爲に斯く書き改めたと云ふのである。是は明かに柯氏の誤で、幹脫は *otok* の音譯であつて幹爾朶 *ordo* とは關係なく、字魯合を削つた事は當を得て居ない。

以上ホンの一、二の例に就いて述べたのみであるが、「新元史」を讀むに當り本書の役立つ場合はまだこの外にも頗る多い事と思ふ。然し乍ら遺憾に耐えない事には、「新元史」二百五十七卷に對して「考證」は僅に五十八卷にすぎず、闕略の部分が甚だ多い。更に細かに之を云へば、本紀は「新元史」の二十六卷中十卷に對して考證が

あるのみで、卷八・卷十一——二十五にはそれがない。元初より世祖初年に至る間、並に最後の惠宗紀等史實に疑問の多い部分には流石に考證も精しく毎卷十葉以上を費し、本書全部の半分計りになつてゐるが、それとても疑問のある史實の總てに及んでゐる譯ではない。例へば太祖の終焉の地は「元史」に「薩里山哈老徒之行宮。」とせるを「新元史」は『靈州』と改めて居るが「考證」には何等之に言及する所がない類である。（なほ此の問題に就ては故籍内博士が「元初史實解疑三則」——東洋學報五ノ三、「蒙古史」研究所收に於て「清水縣附近」なりと考證せられて居る。）

「表」には考證がない。

「志」に考證のあるのは河渠・選舉一・兵・刑法の諸志に止まる。即ち七十卷中十卷にすぎぬ。

残り二十四卷が「列傳」に對する考證であるが、外國傳を除いた新元史の列傳一百四十五卷に對して甚だ簡略と云はねばならぬ。前半は主に元初の宗族・功臣の傳の史實の考證に充てられて居り、後半になると「元史」にはなくて「新元史」に新に傳を加へたものゝ出處を示したものが多くことが目に着くが、それもやはり全部を悉してゐるわけでない。最後の卷五十八に、『胡夢魁。今本無傳。今附此卷後。』といふ一項がある。其本文は見えない

が、柯氏は此の「考證」に依つて「新元史」の校訂増補をもせんとして居たものと思はれる。

斯の如く折角の「考證」も闕略せる部分が甚だ多い。

最初から柯氏が記さなかつたものか、原稿が散佚したのか、それとも出版の際に省かれたものか事情が判らぬが何れにしても我々にとつては遺憾の極みである。柯氏既に世に亡き今日となつては、「新元史」の出處不明の箇所は之を糾す由もない。晩年不遇の裡に世を終つたと聞いてゐる柯氏が之を出版出来なかつたのは是非もないとしても、せめて「新元史」撰述の際に卷末にでも此「考證」を附してあつたならばとの念を禁じ得ない。

* * *

譯史補は同じく柯氏の遺著第三種として、上に述べた「新元史考證」と共に刊行されたもので、洪鈞の「元史譯文證補」(柯氏は常に之を「譯史」と略稱してゐる。以下私もそれを用ひることとする。)の缺を補ふ目的で作られたものである。『柯劭忞撰』と題して居るが、其の内容は實は大部分はドーソンの蒙古史 C. D. Ohsson, Histoire des Mongols の抄譯に過ぎぬ。之を今原書と對比するに卷一、蓋喀特補傳は「譯史」に云ふ乞喀都、即ち第三

代の伊兒汗 Gaikharou の傳で、原書第四編第三、四章に當り、此一巻十葉餘りだけ既に二十數年前出版された所のものである。

卷二、不賽因補傳は第七代の伊兒汗 Abou-Said の傳で原書第七編第三、四章にあたり、「譯史」に目のみあつて本文の闕けてゐるものである。

卷三、喀兒奔特補傳攷異は「譯史」卷十二合兒班答補傳の攷異であるが、内容はやはりドーソンの書よりの抄譯である。喀兒奔特は不賽因の前の伊兒汗 Kharpeude 即ち OEuljaïou 汗を指し原書第七編第一、二章にあたる。(卷頭に英文譯本によると述べてゐるが、内容は英文よりのものでなく、ドーソンよりの譯である)

卷五、拔都傳考異は、原書第二編第三章にあたる。此の卷の第八葉裏より第十一葉に至る間は後に云ふ第四卷と同じ性質のメモの様に見うけられ、中には第四卷と重複してゐる部分もある。第十一葉以後は、原稿が別に一章を爲して居たと斷り書がしてある如く拔都傳とは關係がなく、十一、二葉は原書第一編第四章の抄譯、十二葉以後は原書卷頭の抄譯の様に見うけられる。即ちこの部分は既に田中博士の邦譯がある。又三卷以後も近く馮承

鈞氏の漢譯が出ると聞いてゐる。

以上四卷はドーソン蒙古史の抄譯であり、他の二卷は稍性質を異にするもので、

卷四譯史碎金は Rashid-ed-din, Hammer-Purgstall, Howorth, D'Ohsson, Wasaf 其他諸氏の書より數行づゝ抜き寫したメモである。

卷六、蒙古部族考はドーソンの書より譯したものでない様に見受けられる。先の「新元史考證」に於ても盛に之を引用し、「新元史」の氏族表も多く之に據つたものらしい。卷頭の此の書の性質を述べた文章が途中で斷れて居て、何を翻譯したものか明かでないのは、(柯氏が輯めたものでなく翻譯である事は仔細に見れば直に判る事である)頗る残念であるが、或は Rashid-ed-din「集史」の Berezin 譯本にでも據つたものであらうか。内容は先づ蒙古の開國傳説を記し、次に蒙古の諸部族の事情を簡單に述べたものである。

蒙古波斯其他の固有名詞を音譯した漢字が、それも洪鈞の書其他と字を異にせるものが、至る所に現れて甚だ讀みづらい。近刊の諸書の様に固有名詞に傍線を施すか、せめて二個以上の固有名詞の間には句讀點でも打つてほ

しかつたと思ふ。

(藤 枝 晃)